

大学教員は自身の「困難」を共有できているのか？
大学教員の労働実態に関する研究の整理と調査から
児島功和
(山梨学院大学)

はじめに

本報告では、私たち研究者（としての大学教員）の困難について、先行研究の整理および実施中の聞き取り調査から明らかにする。そして、実態把握と分析から連帯の手掛かりをつかみたいと考えている。なお、報告者自身が大学教員であることから、本報告は再帰的な試みとなり、いわゆる「当事者研究」ともいえる以上、私がどの立場から書き、報告するのかということも示したい。

この要旨では、問題設定ならびに先行研究の一部を示す。調査結果の詳細については、本報告時に明らかにする。

大学教員は自身の「困難」を共有できているのか？

分断と孤立化が問題である——このシンポジウムの趣旨はそうした社会状況への危機意識から提起されたものである。社会学者マイク・デイヴィスも、次のように新型コロナウイルス感染症によるアメリカ社会の分断状況を捉えている。

高額の保険に入り、なおかつ家で働いたり教えたりできる人たちは、自粛要請に従うかぎり快適な隔離環境にいられる。これに対して、公的部門の職員、そしてある程度の保障がなされる組合加入の労働者集団は、収入確保と命を守ることとの間で難しい選択を強いられる可能性がある。だがもっとひどいのは、数百万人にのぼる低賃金のサービス労働従事者、農場労働者、失業者、ホームレスだ。（「大疫病の年に（重田園江訳）」web ちくま、2020年4月7日、<http://www.webchikuma.jp/articles/-/2004>、2020年8月4日閲覧）。

デイヴィスが示した状況は日本においてもほとんど変わらないように思われる。新型コロナウイルス感染症の拡大以降、解雇や雇止め（見込み含む）となった労働者のうち多くが非正規雇用との報道もなされている（「コロナ解雇、3万2千人超に 3日時点、非正規が6割」東京新聞、2020年7月7日、<https://www.tokyo-np.co.jp/article/40689>、2020年8月4日閲覧）。こうした社会的分断はきわめて大きな問題である。

しかし、本報告で取り上げたいのは、別の分断・孤立化である。デイヴィスは「家で働いたり教えたりできる人たちは、自粛要請に従うかぎり快適な隔離環境にいられる」と述べているが、大学教員もこれに当てはまるだろう。2020年度前期（春学期）、私を含む多くの大学教員が遠隔授業をすることになった。専任（任期なし）の教員であれば、このような状況になっても相対的に雇用が安定したままであるし、感染リスクも相対的に低い形で仕事が可能な「恵まれた立場」ではある。だが、そうであっても、大学教員の多くが分断・孤立化させられており、それによって自身の困難を語り、共有す

《シンポジウム》
「分断と孤立化を超える思想」

ることが難しい状況に置かれているのではないだろうか。社会の分断を問題視し、連帯の重要性を主張する私たち自身がどれほど連帯できているのだろうか。大学教員もまたひとりで困難を抱え込み、コロナ禍で自宅で頭を抱えているのではないだろうか。本報告で示すのは、大学教員自身の困難の様相であるが、具体的には働き方や規範に着目する。大学教員はその働き方においてどのような特徴があり、それゆえいかなる困難を抱えているのか、そしてそれはいかなる環境や規範によって引き起こされているのかを明らかにすることを通して、連帯の萌芽を探したい。

コロナ禍の（ある）大学教員の「労働」

私には保育園に通う子どもが1人いる。パートナーである妻は正規雇用として働いている。山梨にある大学に勤めているが、住まいは東京にある。3月下旬、私は37度前半の微熱が下がらない状態となり、4月中旬まで約2週間自宅隔離となった。新型コロナウイルス感染症を疑い、何度も国や自治体が指定する連絡先に電話をし、かかりつけの病院にも行ったが、結局PCR検査を受けることはできなかった。4月中旬に症状は落ち着き、家族には何の症状も出なかったが、万が一を考えて体調不良を自覚してから子どもを保育園には行かせなかった。4月下旬「そろそろ保育園に戻そうか…」という頃に緊急事態宣言が出されることになり、住んでいる市からも家庭保育を強く要請された。その結果、4～5月の2か月間子どもを自宅で朝から晩までみることになった。感染症という性質上、誰かサポートに来てもらうということも躊躇われたため、夫婦ふたりで仕事をしながら子どもをみた。自宅仕事ができるのは「恵まれている」と頭ではわかっていたが、想像を超えた苦しさであった。

私は遠隔授業という初めての経験で授業設計や運営を体調不良のなかで見直しながら、大学教育センター系組織の委員長としても仕事をしていた。何もかもが初めての事態ということもあり、教職員や学生と数多くのメールをやりとりするだけでなく、連絡を取るメディアも激増した（メール、ZOOM、Teams、Slack、LINE、LMS、Messenger）。「おとうちゃん」「おかあちゃん」とずっと一緒ということで子どもは大はしゃぎだったが（ありがたいことにずっと元気でいてくれた）、緊急事態宣言の最中に子どもを公園に連れ出すことも極力控えていた。だが、そうなる狭い自宅で朝から晩まで子どもの遊びに付き合うことになる。むろんその間に私は授業準備、授業、メール、学生へのフィードバック、会議、会議資料作成をし、妻と共同で家事をした。感染防止も考えて、深夜になってから24時間営業の店に生活必需品を購入しに行くことも度々あった。運動不足もあるのか、子どももなかなか寝てくれず、夜遅くによろやく寝てくれたあと、毎晩その寝顔を見ながら「今日もかわいかったね」と妻と話しながら「もう疲れた…」ともよく話した。6月になり、保育園に通わせることができたら状況は一定改善したが、「平常運転」とはいえない状態が続いている（要旨執筆時点）。

この間の苦しさを整理すると、次のことは大きいと考えている。生活の時間の全てが仕事の時間、もしくは子育ての時間になったこと（仕事の時間であり子育ての時間でもある）、仕事の場所と家庭生活やそれ以外の個人生活を営む場所が全て自宅に一元

《シンポジウム》
「分断と孤立化を超える思想」

化されたことがあげられる。そして、このような状況にも関わらず、私は研究を少しでも前に進めたいと日々強く思っていたが全くといっていいほど出来なかったことがある。そして、こうした苦しさをほとんど誰とも共有できなかった。これらは以前から感じていたものだが、コロナ禍によって強化された。また、私ひとりだけの問題ではなく、多くの大学教員に共通する学术界（academia）における構造的問題でもあるように思われる。

新自由主義社会の優等生としての大学教員？

社会学者で文化理論家でもあるロザリンド・ギルは、「沈黙を破る：新自由主義化する学术界の“隠された傷”（Breaking the silence: The hidden injuries of neoliberal academia）」という論文（報告者が共同で翻訳中）で、学术界における働き方を批判的に検討している。ギルによれば、学术界では再帰性が重視されるようになっているが、研究者が自身の経験や制度的環境を反省的に捉えなおすことはほとんどないという。そして、ギルは研究者を「新自由主義社会の優等生」になっているとする。労働の不安定性や断片化、多忙化に対して集合的に抵抗するのではなく、過度に競争的な環境のなかで個々人で適応してしまうという。要するに、大学教員はきわめて巧妙に分断統治されているとギルは考えているのだ。

そうであるとしてそれはなぜか。そうした状況を打開するにはどうすればいいのか。ギルの論文を含む先行研究の整理と報告者が実施中の調査から探ってみたい。